悲しみが喜びに変わる時

奨励	マーサ･メンセンディーク〔まーさ・めんせんでぃーく〕
奨励者紹介	同志社大学社会学部准教授
研究テーマ	多文化社会福祉・国際社会福祉

「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言っておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

（ヨハネによる福音書　16章20―24節）

Merry Christmas!

この季節はクリスマスツリーのライトアップ、その他美しいリースやクリスマスの飾り付けで街のあちこちは美しく、賑やかです。同志社もキャンパスのクリスマスツリーは実に美しいですね。また、クリスマス商戦もすごいものです。デパートやレストラン、ベーカリーではクリスマスに向けて美味しいケーキやごちそうで私たちを「誘惑」します。

クリスマスの希望

私は昨年と同様、今年もまたこのようなきらびやかなクリスマス気分にどうもなれないのです。昨年は東日本大震災の起こった年で、被災地の厳しい現実を考えると、お祝いする気分ではありませんでした。昨年、東北の方たちは多くを失いました。大切な家族や友人を亡くした方々、住み慣れた故郷から離れて暮らさなければならない方々、哀しみのうちにクリスマスとお正月を迎えられた方々のことを想うと、お祝い気分にはなれなかったのですね。昨年の同志社のクリスマスキャンドルライトサービスの礼拝でメッセージを頼まれたのですが、そこで私はこのようなことを言いました。「この暗い現実だからこそ、イエス・キリストの誕生が示す希望がより意味をもち、私たちはこのような時だからこそクリスマスを必要としている」、と。

今年もまた同じことが言えるのです。
東北ではまだ故郷に戻れない現状や職を失い生活が苦しい方、希望を失い自殺者も増えているようです。そして、原発事故の被害で放射線量の高い地域の現状は特に深刻です。
今月の初め、私は福島県で行われたある会議に出席しました。
日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）主催の「原子力に関する宗教者国際会議」という会議が会津若松で開催されました。この宗教者会議は、２００７年から２年ごとに憲法９条と平和をテーマに行っている会議です。最初の年は東京で行われ、２年後に韓国、昨年は沖縄で行いました。今年は特別に原子力の問題をとりあげることになりました。参加者は日本、韓国、香港、フィリピン、タイ、ドイツ、アメリカなどのキリスト教、仏教の宗教者や団体が参加しました。
会議の初日はスタディー・ツアーで福島原発に近いいわき市に出向き、そこに住む方々の話を聴きました。そして会津若松では「会津放射能情報センター」の活動や、放射線量が高い地域で暮らす人への支援について、そして海外の脱原発運動の取り組みなどについて話を聴くことができました。
４日間の会議の最後に「福島からの信仰宣言」を作成しました。

福島からのメッセージ

その一部を紹介したいと思います。

1．原子力に関する宗教者国際会議は、２０１２年12月４日から７日まで福島県いわき市および会津若松市において、日本、沖縄、韓国、フィリピン、タイ、ドイツ、香港、インドネシア、スイス、カナダ、米国から87人が参加して開催されました。私たちは、２０１１年３月11日に起きた地震、津波、東京電力福島第一原子力発電所の事故が、福島県と周辺地域の人びとと自然に与えた影響を目の当たりにし、同時に福島の現状に対する現地からの取り組み、あるいは海外からの支援連帯の現実にも触れました。家族と地域共同体が分断されている事実、住み慣れた家と仕事を失い、こどもたちの健康問題を憂慮する人びとの叫び、とくに母親たちの苦しみと闘いに私たちは深く心をうたれました。「会津放射能情報センター」の働き、また苦しむ人びとに連帯し、癒しのために奉仕するさまざまな働きを知り、さらに原発廃絶とエネルギー使用を変えようと努力している海外の信仰共同体についての報告を受けたことも有意義な体験です。これらの証言は、私たちを励まし、希望を与えてくれるものです。
　私たちは、砂場で遊ぶことを恐れるように教えられている３才の幼いこどもについての話に耳を傾けました。こどもの健康を守るために転居を決めた母親が、汚染された地域から去ることをまわりの人びとに言えず、嘘をつかなければならなかった苦しみを彼女の夫の口から聴きました。果たして再び海に出て、漁を続けることができるのか、まったく見通しのたたない漁師の嘆きの声も心に残りました。また福島の住民が、健康について医師のセカンド・オピニオンを聴くことを阻まれているという事実も忘れることができません。地域に政府が設置した放射線測定器と、個人の測定器の測定値との明らかな違いについての映像、汚染地域に残され死を待つばかりの牛、自らの命を断った人が最後に書き残した一言「原発さえなければ」の文字、無人の禁止区域にかけられた「原子力明るい未来のエネルギー」の看板などが、無言のうちに私たちに語りかけました。会議で話された仏教の僧侶の方の言葉「苦しんでいる人たちがお互いに傷つけあう福島になってしまいました。福島が叫んでいます。大地が空が泣いています。福島の声を聴いてください。声にならないこどもたちのいのちの叫びを聴いてください。」原子力についての真実を見据えながら、私たちは「いのちは宝」であることを、祈りのうちに受けとめ、宣言します。

というのが宣言の前半です。

イエスの時代と現在

クリスマス、つまりイエス・キリストの誕生は苦難のうちにいる人びとに希望を与えた出来事でした。神が、私たちに幼子の誕生をとおして世界に希望をお与えになったのです。イエスが生まれた時代はローマ帝国の全盛期でした。地中海周辺から中近東にかけてローマの支配は確立し、パックス・ロマーナと呼ばれる時代でした。大きな戦争はないものの、力によって押さえ込む平和がこの地域を支配していました。ローマの一般庶民、特に植民地の人びとの生活は苦しくみじめなものでした。イエスの生まれた地は、このローマの属領でした。支配とそれに伴う経済的な搾取で、多くの民族は希望のない生活を強いられていました。人びとの希望は預言者たちの語った約束の言葉、「救い主」キリストの到来を待つことでした。そして、イエスは人びとの期待のもと、愛の教えを語りました。権力に対して脅威にもなる真実を語り、しきたりが多い社会のなかで最も貧しい人、虐げられた人びとの解放を語りました。貧しい人びとや権力のない一般庶民にとって、希望を与える救い主でした。
この時代も世界を支配する権力というものがあります。パックス・アメリカーナとも言われるぐらい、アメリカの支配力が存在すると指摘する人もいます。たとえば、日本は沖縄の今の現状を考えると、まさに、そのとおりだと私も思います。そして、原子力という支配もそうです。原子力の「平和的利用」は偽りで、核兵器の延長線上にあり、人と環境に破壊的な力をもっているもの。原爆という武器を利用したアメリカが戦後、原子力開発を日本に勧めた訳です。その道は危険でしたが、危険であることは明らかにせず、良い点だけが強調され、「安全神話」を多くの人は信じてしまいました。初めから危機感をもって声をあげていた人たちは、特にチェルノブイリの事故後にはその教訓を日本にも生かしたいと動きましたが、日本の原子力政策はぶれませんでした。そして福島の事故が起きてしまったのです。

命を守るために

先日の会議での宣言の後半はこのように続きます。

3．私たちの体験と学びによって、原子力は決して安全ではないこと、放射線による被曝には安全基準は存在しないこと（中略）を確認します。核兵器と原子力は、実にひとつのコインの両側であって、政治、軍事、経済の複合体が、自分たちの利益のために創りあげたものです。原子力は、人間のいのちと環境にこの技術が与える悪影響を無視し、当初から戦争を目的として、政治、軍隊、企業によって開発されたのです。原子力技術を開発しながら、核兵器を表面的に否定する国ぐに〔原文ママ〕は、自然とその力を支配できると信じる傲慢を露呈しています。多くの国が、核兵器の製造と備蓄はもちろんのこと、発電施設としての原発の建設のために、巨額な費用をつぎ込み続けました。より意味のある人間のニードのために役立てるのではなく、環境を破壊し、人間、動物と植物の死と疾病を招き、（中略）人間は過ちを犯すが、その過ちから利益を得るものは、過ちを無視し、また学ぶことをしないという事実に、あらためて気づかされています。
4．私たちは、真摯にいのちを育み、どこまでもいのちを守ること、さらに原子力と核問題について真実を語り、誤解を招く「安全神話」を明らかにすることを、信仰者の責任として引き受けます。（中略）苦しむ人びとに寄り添い、彼らに課せられた不正を明らかにするために、彼らと心を一つにして行動することを約束します。さらに政府と企業による

放射性物質の移動をモニターし、周縁部の共同体、原子力を持たない国、そして未来の世代に核廃棄物が押し付けられる問題について、警告を発します

そして、最後に七つの具体的な行動を明記しています。

５．上記に基づき、私たちは決意します。
√私たちの信仰共同体において、原子力（中略）についての真剣な討議を始め（中略）信仰共同体としての行動計画を立ち上げること。
√核兵器と原子力技術の関連性についての真実を広く知らせ、原子力についての誤った情報と情報隠しについて問いかけ、公表すること。
私たちは、真摯にいのちを育み、どこまでもいのちを守ること、さらに原子力と核問題について真実を語り、誤解を招く「安全神話」を明らかにすることを、信仰者の責任として引き受けます。（中略）苦しむ人びとに寄り添い、彼らに課せられた不正を明らかにするために、彼らと心を一つにして行動することを約束します。さらに政府と企業による放射性物質の移動をモニターし、周縁部の共同体、原子力を持たない国、そして未来の世代に核廃棄物が押し付けられる問題について、警告を発します
√原子力の誤った利用について直接的非暴力行動を始めること。
√原子力の廃止を実現するために、（中略）他の組織との協働ネットワークを築くこと。（中略）
私たちは、真摯にいのちを育み、どこまでもいのちを守ること、さらに原子力と核問題について真実を語り、誤解を招く「安全神話」を明らかにすることを、信仰者の責任として引き受けます。（中略）苦しむ人びとに寄り添い、彼らに課せられた不正を明らかにするために、彼らと心を一つにして行動することを約束します。さらに政府と企業による放射性物質の移動をモニターし、周縁部の共同体、原子力を持たない国、そして未来の世代に核廃棄物が押し付けられる問題について、警告を発します
√福島の人びとおよび原子力のもたらした被害によって苦しんでいる他の共同体とともに祈り、その声を増幅して彼らの体験を世界に告げること。
√２０１３年世界教会協議会の総会にこの宣言を届け、原子力についての分科会を実現させること。
√原子力に頼る社会を、真に持続可能、クリーンで安全なエネルギーに基盤を置く社会へと変革するために働くこと。

最後に宣言はこのように終わります。

６．福島で開催された「原子力に関する宗教者国際会議」は、原子力のもたらす苦しみの現実について、多宗教、多民族の参加者の目を開かせました。私たちは、原子力の廃絶、原子力ゆえに苦しむ人間共同体の癒し、環境（創造の業）を取り戻すために、できる限りの努力をすることを誓います。今、ここから、この決意と責任を果たすために、それぞれの共同体に戻ります。
２０１２．12．７　原子力に関する宗教者国際会議参加者一同
（「ＮＯ！原子力　福島からの信仰宣言２０１２」より）

ここ京都にも、福島から避難してきた方々が暮らしています。その方々の話を聴いて、何らかの支えになりたいと思い、福祉学科の学生が今取り組んでいます。原発事故の現実、その危機意識が低い関西で、福島の方々の声を発信したいという思いをもって活動しています。夏には福島県の子どもたちの保養キャンプにかかわった学生も多くいます。このような動きは希望です。痛みをもっている人と共にいる、寄り添う事―そこには愛があります。愛があるところには喜びもあるのではないでしょうか。　このような愛を私たちの周りに育みたいものです。これこそクリスマスのスピリットなのです。

イエス・キリストの誕生は、ローマ帝国にとって都合の悪い人物の誕生でした。なぜなら、イエスは真実を語り、権力のない人びとと寄り添ったからです。そのイエス・キリストの教えに今一度このクリスマスにまた立ち戻り、真実を語り、そして傷ついている人へ愛を示していきたいものです。そうすることで、私たちの悲しみは喜びと変わるのだと思うのです。

2012年12月18日　今出川火曜チャペル・アワー「クリスマス礼拝奨励」記録